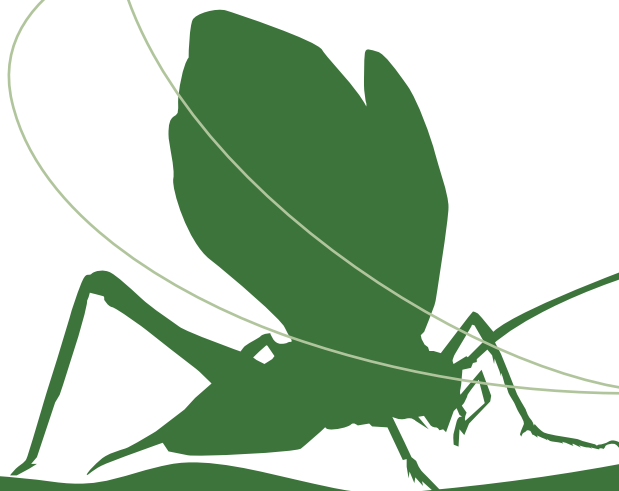




プチ図鑑

# 兵庫の身近な 秋の鳴く虫



# 目次 CONTENTS

はじめに	1
鳴く虫の声を聞き分けよう	2
唱歌の5種	4
覚えやすい3種	8
コオロギ3種	9
スズ類3種	10
ヒバリ類3種	11
キリギリス類	12
鳴くバッタ	13
鳴く虫の見わけかた	14
コオロギのなかま	16
キリギリスのなかま・鳴くバッタ	18

## はじめに

秋の鳴く虫というのは、コオロギやキリギリスのなかまのことです。これらの虫たちは、唱歌に唄われているように、今も昔も、私たちの身近なところにすんでいます。クツワムシやスズムシのように、かつてほど身近には見られなくなった種もありますが、人と自然の博物館のある兵庫県三田市のニュータウンでも、30種以上の鳴く虫の声を聞くことができます。

しかし、現在、自動車や電車の騒音はかすかな虫の声を消し去り、住宅の防音サッシは、確実に虫の声を遮断します。そうこうしているうちに、身近にいろんな虫が鳴いていることさえ、私たちは忘れてしまうかもしれません。

さあ、この小冊子を携えて、外へ出てみましょう。多くの鳴く虫たちが歓迎してくれるはずです。

みなさん、虫の声がわかると、世界が変わりますよ。

## 鳴く虫の声を聞き分けよう



### 聞き分けのコツ：春から季節を追って

はじめての人は、鳴く虫の最盛期に聞き分けるのはやめにしましょう。鳴く虫がたくさん鳴いているところにいっても、ワーっと聞こえてきて、聞き分けるところか、鳴き声の迫力に負けて、引き下がってしまいます。

鳴く虫は秋、と思いついでいる人は多いのですが、じつは春先から鳴いています。ただし、数が少ないので注目されません。しかし、この数の少なさは、初心者が覚えるのに最適な条件です。初夏が過ぎ、夏になり、そして秋に近づくにつれて鳴く虫は次第に増えていきます。

まず、4月。暖かすぎると思えるような夜に、川原の土手や田んぼに近い道路を歩くと、ゾーゾーと耳に突き刺さるような連続音が聞こえてきます。多くの人は虫の声とは思えず、電線とか何か機械の異常音ぐらいに思っていることでしょう。これが越冬明けのクビキリギス(19ページ)の声です。

5月、田んぼに水が張られ、アマガエルが鳴き出すころ、その声に混じって、ビッビッビッ・・・という連続音が聞こえてきます。田んぼの畦にすんでいるタンボコオロギ(17ページ)です。もう少し地面が乾いたところでは、コガタコオロギが、ビーという一音鳴きで3秒おきぐらいに鳴きます。

6月に入り、ヨシが生えているような水辺に行くと、リッリッリッリと鈴をこるがすようないい声が聞こえてきます。声の主は、キンヒバリ(11ページ)です。ちょうどゲンジボタルが飛び交う季節なので、多くの人の意識は視覚のほうにいてしまい、なかなかこのいい声を聞いてくれません。芝生のような丈の短い草原があると、5,6mmの小さいマダラスズ(10ページ)が鳴き始めます。小さくともはねがあって鳴くことができるということは、幼虫ではなく、成虫の証拠です。

季節が進むにつれ、多くの種が加わります。主だった30種で「鳴く虫カレンダー」をつくりました。これを見ると、9月が鳴く虫のピークですね。まったく鳴かないのは12月の後半から3月いっぱいです。それ以外の季節には、鳴く虫を充分楽しむことができます。

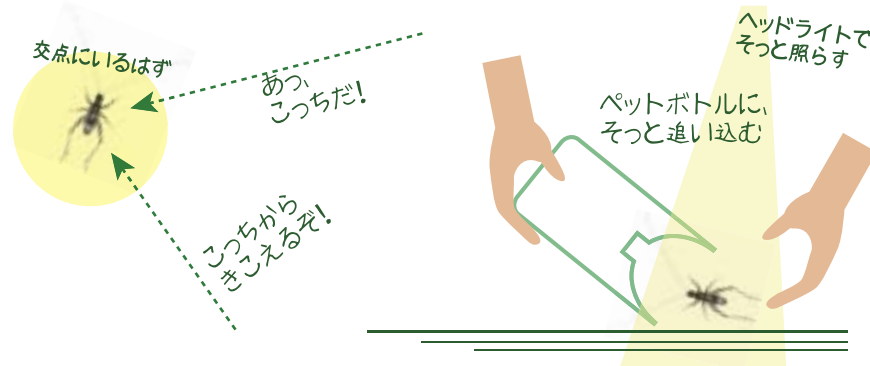
	4	5	6	7	8	9	10	11	12		4	5	6	7	8	9	10	11	12	
クビキリギス	●	●	●					○	○		クツワムシ				●	●				
タンボコオロギ		●	●	●				●	●		マツムシ				●	●	●			
コガタコオロギ		●	●								スズムシ				●	●	●			
キンヒバリ		●	●	●				●	●		カンタン				●	●	●			
マダラスズ			●	●				●	●		カナタタキ				●	●	●			
ケラ			●	●				●	●		クサヒバリ				●	●	●			
シバズ			●	●				●	●	●	ハラオカメコオロギ				●	●	●			
ヒロバナカンタン			●	●				●	●		ヒゲシロスズ				●	●	●			
ヤマヤブキリ			●	●	●						セスジツユムシ				●	●	●			
ヒメギス			●	●	●						ササキリ				●	●	●			
キリギリス					●	●		●			エンマコオロギ				●	●	●	●		
カヤキリ					●	●		●			ミツカドコオロギ				●	●	●	●		
クサキリ					●	●		●			オナガササキリ					●	●	●		
ハヤシノウマオイ						●		●			クマスズムシ					●	●	●		
アオマツムシ						●		●			ツツレサセコオロギ					●	●	●	●	

三田市周辺の代表的な鳴く虫カレンダー

数字は月。1月から3月は、鳴く虫はいません。○は、成虫はいますが、越冬中で、鳴きません。

### 聞き分けのコツ：つかまえる

鳴く虫をつかまえようとする、鳴き声もさることながら、どんな環境にいるのかも、よくわかります。鳴いている虫がいたらそっと近づいてみましょう。2人でペアになって2方向から声を聴くと、虫の位置がわかりやすくなります。鳴き止まないように、足音をしのばせて近づくのがコツです。運良く姿を見つめることができれば、今度は、逃げられないようにつかまえます。ペットボトルのコオロギ採り器を使うと、つかまえやすく、虫を傷めることも少ないです。つかまえた虫を飼ってみると、鳴く虫の音がさらによくわかります。





マツムシ

*Xenogryllus marmoratus*

体長 18 ~ 38 mm。東西南部より九州まで分布。金属音で「チンチロリン」と聞こえる。関西では松ぼっくりのことを「ちんちろ」というので、そこから松虫になったという説がある。林の周辺や道端など背丈の高い乾燥した草むらの根元付近でリズムカルに鳴く。

スズムシ

*Meloimorpha japonica*

体長 17 ~ 25 mm。多くの人に飼育されているが、野外では少なくなっている。湿った草地や石垣の間などで鳴いている。オスだけで鳴く「呼び鳴き」と、メスがそばにいるときの「誘い鳴き」でかなり違っているが、飼育のものは必ず雌雄が一緒なので、誘い鳴きになる。

撮影：林 成多



エンマコオロギ

*Teleogryllus emma*

体長 26 ~ 40 mm。もっとも大きく、田んぼ近辺の草むらに多い。複眼の上縁に沿った白斑（眉斑）が目立ち、地獄の「閻魔大王」の顔を想像させるところからエンマの名前がついた。メスがそばにいと鳴き声が変わる。鳴き声はコロコロ・リーだが、キリキリ・リーか、ヒリヒリ・リーと聞こえる人もいる。

キリギリス

*Gampsocleis buergeri*

体長 38 ~ 57 mm、成虫期 6 ~ 9月。唱歌の2番「こおろぎや」の部分を「きりぎりす」とする説もある。しかし、キリギリスは秋の夜長よりも真夏の炎天下に鳴くことが多く、音色は「ギー」とにごっていて、「キリキリ」とは聞こえない。





クツワムシ

*Mecopoda nipponensis*

体長 50 ~ 53mm と大型。成虫期 8 ~ 10 月。林縁などの丈の高い草地にいるが、生息地は局地的。大声で「ガチャガチャ」と鳴くので、馬具の轡(クツワ)の音を連想して命名されている。別名の「クダマキ」もうるさい鳴き声から。緑色型と褐色型がある。暗くならないと鳴かない。

(「クダマキ」=織物で、横糸を通す管に糸を巻きつけること。単調でうるさい。転じて、酔っぱらいが「くだをまく」)



緑色型

ハヤシノウマオイ

*Hexacentrus japonicus*

体長 28 ~ 36mm。8~9月に多い。主に低木地や森林の下草の上で「スイーッチョン」と長く鳴く。明るい草地や川原で「シッちょ・シッちょ」と短く鳴くのはハタケノウマオイという別種。馬子が馬を御すときの舌鳴らし音からの連想で「ウマオイムシ」と名がついた。肉食性なので、採集した他の鳴く虫との同居は避けたほうがいい。



カンタン

*Oecanthus longicauda*

体長 11 ~ 20mm。成虫期 8 ~ 11 月。背の高い草地やクズの茂みなどにいる。やさしい鳴き声に幽玄なイメージをもった命名者が「邯鄲の夢」という中国の古事を連想して「カンタンギス」とした。しかし、ギリギリの仲間ではないので、ギスをとって「カンタン」になったらしい。メスは鳴かないが「鳴く虫の女王」と呼ばれる。

カネタタキ

*Ornebius kanetataki*

体長 7 ~ 11 mm。秋遅くまで鳴いている。市街地の公園や街路樹でも見られ、昼間もよく鳴く。仏事するとき使用する鉦をたたいているように聞こえるので、カネタタキとついた。歩き回りながら鳴くのでなかなか捕獲できないが、垣根用の灌木や低木の下側に昆虫網をおいて強くたたくと、落ちてくる。



アオマツムシ

*Trujalia hibinonis*

体長 23 ~ 28 mm。成虫期 8 月下旬 ~ 10 月後半。大正時代に中国から入ってきた帰化昆虫。街路樹を好むので、道路沿いに都市に分布をひろげつつある。車の騒音に負けないぐらいの大声なので、他の鳴く虫の声を聞くととき邪魔になる。気温が下がる晩秋には昼間もときどき鳴くが、音は弱々しくゆっくり。



撮影：林 成多

ツツレサセコオロギ

*Velarifictorus micado*

体長 13 ~ 22mm。もっとも人家に近い環境にいるコオロギ。駅のプラットフォームでもよく鳴いている。切れ目なく「リリリ…」と鳴き続ける。この鳴き声が秋の夜長に緩れものを直しているイメージと重なり、「肩刺せ、裾刺せ、緩れ刺せ」と聞こえてしまうところから、変わった和名がついた。

ハラオカメコオロギ

*Loxoblemmus campester*

体長 13.5 ~ 20mm。さまざまな草地にいるが、やや乾いた原っぱに多い。「リリリリ」と5音か6音で鳴く。オスの顔の前面は平らで下ぶくれなので、「オカメ」とついた。より高音で速く鳴くミツカドコオロギ、より低音でゆっくりのモリオカメコオロギがいる。高原には、さらにゆっくりのタンボオカメコオロギがいる。



ミツカドコオロギ

*Loxoblemmus doenitzii*

体長 16 ~ 21mm。人家のまわり、街路樹の落ち葉の下などにごくふつう。鳴き声はハラオカメに似るが、より鋭く速い。「キキキキ」ときこえる。オスの顔はオカメコオロギ類と同じく平らだが、さらに3つの突出部があり、ミツカドの由来となっている。この突出部が小さいものがある。

## シバスズ

*Polioneonemobius mikado*

体長 6.5~8mm。6月下旬~11月下旬。年2回発生する。芝生や短い丈の草を好み、気づかないだけで、庭先や公園など、あちこちにいる。「ジージー」と高音で不規則に切って鳴く。



## マダラスズ

*Dianemobius nigrofasciatus*

体長 6~8 mm。6月上旬から11月上旬。シバスズ同様、年2化。シバスズよりもさらに草の少ないグラウンドや短い丈の草地に多い。「ジーン、ジーン」と規則的に切って鳴く。博物館の近辺ではシバスズより多い。後ろ足のまだらもようが特徴。



## ヒゲシロスズ

*Polionemobius flavoantennalis*

体長 6~9 mm。8月中旬~11月。年1化。長い丈の湿った草地に見られる。「チリリリリリ・・・」と連続音で鳴く。触角の根元側が白いのが特徴。



撮影：林 成多

## クサヒバリ

*Svistella bifasciatum*

体長 7~8 mm。8~10月が成虫期。生垣、灌木、林縁のマント群落にふつう。昼夜とも透き通った響きで「フィリリリリ・・・」と鳴き続けるが、姿を見つけるのは難しい。早朝の静かなときによく響くので、「アサスズ」の別名をもつ。夜はアオマツムシが近くで鳴くと聞こえにくい。



## キンヒバリ

*Natula matsumurai*

体長 5.5~8 mm。成虫期 6~8月。幼虫越冬。川沿いや池のまわりの湿地帯にふつう。「リリリリリ・・・」とやさしい声で昼間も鳴く。ホタルを観察しているとしばしば聞こえてくる。



撮影：林 成多

## カヤヒバリ

*Natula pallidula*

体長 6~7 mm。幼虫越冬で6月に羽化し、秋まで見られる。キンヒバリより 乾いた草地の、ススキなどのイネ科にいる。分布は局地的。キンヒバリに形も体色も似ているが、少し色が薄くてやや小型。鳴き声はまったく違って低い音で「ビリビリビリ」とゆっくり鳴く。

